

社団法人私立大学情報教育協会
平成 21 年度第 2 回 CCC 社会学グループ運営委員会議事概要

I. 日 時： 平成 21 年 7 月 31 日(金)午後 4 時 30 分～6 時 30 分

II. 場 所： 私情協事務局会議室

III. 出席者： 土屋委員、津田委員、奥村委員

事務局： 井端事務局長、森下主幹、山野上係長

IV. 検討事項：

1. 社会学における学士力について

「社会学の学士力」について委員が原案を持ち寄り、意見交換を行った。それぞれの案は以下の通りであった。

A 案：要素と機能をとらえる「理論」、さまざまな手法を含む「調査」を柱とする案

- ① 社会を構成する要素と要素間の相互作用およびそのはたらき（機能）について説明できる。
- ② フィールドワーク、社会調査を通じて社会の問題状況を把握することができる。

B 案：問題発見、調査分析、構造理解、実践提言という 4 つの課題に分ける案

- ① 社会で生起しているあたりまえに思われる現象を、問題として発見し、社会的な文脈のなかで問いの対象とすることができる。
- ② 社会的な問題に対し、現場の視点に基づいた実証的な調査によってデータを収集し、根拠と客観性のある分析をすることができる。
- ③ 社会のマクロな構造や歴史的な変動を認識する枠組みをもち、ある社会現象の分析をそれとの関連において理解することができる。
- ④ 社会の展望についてあるヴィジョンをもち、それを基準にして社会的な問題の解決について実践的な提言を行うことができる。

C 案：理論を「ミクロ／マクロ」に分け、実証、提言という 4 つの柱を設ける案

- ① 社会秩序の形成・維持を可能にする人間の営みについて、基礎的な理論を理解できる。
- ② 現代社会の成り立ちを産業化、都市化、情報化といった歴史的趨勢のなかで理解できる。
- ③ 社会調査の基本的な手法を取得し、自らの問題関心に沿って調査を実施することができる。
- ④ 現代社会を取り巻く様々な問題について、社会学的な観点から新たな視座を設定し、その解決策を提示することができる。

これらの案について、以下のような意見交換がなされた。

- 今回の「学士力」は、どの学問でも追求する課題を示すのではなく、社会学を学ぶと何が身につくか、という固有の力を明記するものでなければならない。社会学のスタンスとはどこにあるのかを明記してほしい。
- 「人間の営み」を扱うことが社会学のひとつの魅力だが、それは相互行為が一定のルールにのっとって社会秩序を形成するという謎を理解することにつながる。「秩序がいかにして可能か」という構成原理をとらえることが社会学の独自性ではないか。
- 「人間の営み」は「ミクロ」な水準の理論ということになるが、抽象的であるため「日常の営み」としてはどうか。これは「共生する」という課題にもつながるだろう。ともに支えあうという問題を捉えることが社会学の課題ではないか。
- 秩序というものはただ維持されればよいというものではなく、それがひとを苦しめ、抑圧するという側面もとらえなければならない。ゆえに秩序をただ肯定するだけではなく、それをどこまで前面に出すか、という点が問題である。また、新しい秩序のあり方を提言する、ということも重要である。
- このような課題は「ミクロ」な現象を「マクロ」な構造変動につなげる社会学的想像力を必要とするものであり、「構造」と「歴史」を重視することが書きこまれるべきである。ただ「構造」や「歴史」といっても抽象的であり、構成要素（ミクロ）の機能（マクロ）といった認識枠組みを示すべきではないか。
- マクロな変動をめぐるキーワードを明示したほうがよい。産業化、都市化、情報化などがある。
- 社会学の魅力として、「あたりまえ」を問いの対象とし、通常は「問題」と見えないものを問題として発見する、という点がある。この「問題発見」の力をひとつの項目とするべきである。しかし、「あたりまえ」がなぜ「問題」となるか、その意味が伝わらない虞があるのではないか。
- 社会学が常識とは別の視座を設定することができる能力は他の学問にはないものであり、それによって社会問題を（通常問題とされないものを含めて）自立的にとらえることができる。
- 「通常見過ごされている現象」を「問題として発見する」という文言にしてはどうか。
- 社会調査の能力を身につけることは、社会学が提供できる重要な力である。
- 「客観性のある分析」という文言は、担保することが難しいと思われるが、重要なことは、方法論に基づいているということであり、「実証的な調査によって」「根拠のある分析をする」という文言で十分ではないか。
- 「現場」を踏まえるということが他の社会科学とは異なる社会学の魅力のひとつであり、この言葉を調査にかかわる項目に残してはどうか。
- ただ理論を理解し、調査するだけでは十分な意味を示すことはできず、問題への解決策を提示する力という点を明記したほうがいい。しかし、それは「学士力」として掲げるべき水準なのかは検討を要する。
- 大学4年間の到達目標として、「実践的な提言を行いうる」と掲げるのはよいことではないか。学生の興味関心が縮小している傾向がある中で、「社会の展望についてのヴィジョン」をもつことができるということ、社会学がめざす目標として記しておくのは重要なことである。

- ・ 自分の興味があるものを調べました、だけでは目標として物足りない。これまで社会学がもってきた学問としての蓄積や体系性を反映することが重要である。
- ・ 自分たちで社会の現象を見つけ、問題を解決し、社会をみずから作る、という力が求められるのではないか。

以上の議論を踏まえ、社会学の基本学士力を「ミクロ」「マクロ」「発見」「調査」「提言」の5項目とし、それぞれの文言を調整し、以下の「社会学の学士力」第1案を得た。

(マクロ)

現代社会の成り立ちと変動を産業化、都市化、情報化といった歴史的な枠組みから捉え、ある社会現象をそれとの関連において理解することができる。

(ミクロ)

社会秩序の形成・維持を可能にする日常の営みについて、基礎的な理論を踏まえて理解できる。

(発見)

通常は見過ごされている現象を社会的な問題として発見する視点を持つことができる。

(調査)

社会的な問題に対し、現場の視点に基づいた実証的な調査によってデータを収集し、根拠のある分析をすることができる。

(提言)

社会の展望についてヴィジョンをもち、社会的な問題の解決に向けて実践的な提言を行うことができる。

2. 今後の進め方

これをもとに、次回までに各項目に対応する科目群のイメージを検討してることになり、締切を9月18日(金)とした。なお、次回委員会は9月25日(金)午後4時から開催することとなった。